

〈論文〉

## 呉清源打込み十番碁と読売新聞

田 中 恒 寿

### はじめに

昨2014年11月30日の未明、呉清源九段が亡くなった。享年百歳だった。呉清源は昭和の碁会を代表するのみならず、日本の囲碁史の中でも屈指の名手として評価が高い棋士である。技術的には「新布石」によってとりわけ序盤の戦略的発想に革新をもたらし、社会的には度重なる「打込み十番碁」における圧倒的な戦績によって人気を博した。本論では、この打込み十番碁を中心に、読売新聞が大正・昭和の囲碁界に果たした役割について考察すると同時に、囲碁欄の充実が新聞の発行部数拡大の重要な要素の一つであったことを跡づけていきたい。

### 新聞囲碁欄の黎明期

そもそも囲碁の棋譜が新聞に掲載されるようになったのは1878年（明治11年）4月1日のことで、3月29日に行われた中川亀三郎・古橋杵三郎の対局が『郵便報知』に載ったのがその嚆矢とされる。翌1879年4月には、日本初の囲碁雑誌『囲碁新報』（月刊）が方円社の機関誌として創刊された。この『囲碁新報』のスタイルが、現在の新聞囲碁欄に踏襲されているという。

さて、初めて新聞に囲碁欄が創設されたのは、1896年8月7日のことである。『時事新報』に「碁の葉」という欄が新設され、第1局目には安井算英六段・田村保寿四段戦（田村先、中押勝ち）の対局評が掲載された<sup>1)</sup>。

その後、本因坊、方円社、裨聖会といった組織がそれぞれ独自に新聞社と棋譜掲載の契約を交わしていたのだが、1924年7月17日、三派が合同して日本棋院が創設（牧野伸顕総裁）されると、新聞社への棋譜提供は日本棋院が抽選して提供する方式に改められることになった。このやり方に不満を持った報知新聞社が、雁金準一、鈴木為次郎、加藤信、高部道平（以上六段）、小野田千代太郎五段の5棋士と独自の棋戦を行う契約を結ぶ。しかし、この5名は日本棋院を除名されたため、同年10月8日、棋正社を創設するに至った。こ

の結果、日本棋院の大手合は朝日新聞、棋正社の手合は報知新聞、日本棋院の新進打切碁戦は毎日新聞の前身である東京日日新聞、といった棲み分けがなされるようになる。

さて、この棋正社の動きに目を付けたのが読売新聞社の社長に就任したばかりの正力松太郎だった。

## 読売新聞と囲碁

今日では朝日、毎日と並んで三大新聞の一つに数えられる読売だが、正力松太郎が社長に就任した1924年当時は、一日平均の発行部数5万部程度の弱小新聞でしかなかった。一方の朝日、毎日（当時は東京日日新聞と大阪毎日新聞）は100万部を超えている。ところが正力社長の経営手腕のおかげで、以来読売は右肩上がりに部数を伸ばし、約半世紀後（1977年）には朝日を抜いて発行部数日本一となるのだが、正力の興行師的アイデアの数々を『読売王国』の中で上之郷利昭は次のように列挙している。

両国の国技館の納涼博覧会をはじめ、正力の紙面の改良は、ラジオ版に始まって日曜夕刊など、いずれも成功してさらに続いた。

大正十五年ごろからは、釣りの記事、競馬の予想、麻雀欄など、折り折りの大衆人気の焦点を機敏につかんでこれを紙面に盛り込んだ。一方には文芸欄や婦人欄の特色をますます充実するとともに、科学欄・農業欄なども試みた。多数の漫画家を集めて漫画ページをつくり少年読者をもって家庭に楔を打ち込み、引き続きこれは独立の色刷り少年新聞として月三回の付録に発展させ、少年たちの人気を集めた。

とくにラジオ欄は全新聞が真似をし、冷笑していた朝日新聞までがバスに乗り遅れては、と始めざるをえないほどのヒット企画であった。

当時誰も気づかなかったコロンプスの卵とでもいうべきアイデアが、新聞にはまったくの門外漢だった正力の頭から次々と発想されていたのである。<sup>2)</sup>

ここには触れられていないが、野球を別格として、囲碁・将棋欄も新聞の売れ行きを左右する目玉商品の一つだった。正力社長最初期の企画として、囲碁の院社対抗戦（1925年）は読売新聞の部数拡大に大きく貢献したと思われる。実際、1924年に5万部程度だった読売の一日平均発行部数は、正力社長就任後わずか10年で朝日・毎日に迫る勢いを見せし、1934年に大日本東京野球倶楽部（現、読売ジャイアンツ）を創設して以来、売り上げは飛躍的に拡大して毎日を抜き去り、1977年には朝日をも凌駕した。

話を囲碁に戻そう。正力の社長就任は、日本棋院の創設と軌を一にする。さらには同じ

1924年、日本棋院のやり方に不満を持つ5棋士（雁金七段、鈴木七段、高部六段、加藤六段、小野田五段）によって棋正社が結成され、報知新聞と独自の契約が結ばれた。この囲碁界の反乱に目ざとく反応したのが正力松太郎である。1926年8月には、日本棋院対棋正社<sup>3)</sup>の団体争碁である「院社対抗戦」——正式名称は「日本棋院対棋正社敗退手合」——を企画し、大倉喜七郎（男爵、大倉財閥二代目）日本棋院副総裁に挑戦状をたたきつけた。中山典之『昭和囲碁風雲録』によると、大倉副総裁は「顔を洗ってこい」と取り合わなかったが、正力社長は日本棋院の看板棋士である本因坊秀哉に巨額の対局料——秀哉の家族並びに門弟を一生面倒みられるほどの額とされる——を持ちかけ、牙城を切り崩すことに成功した。中山曰く、

正力としても一代の大バクチだったろう。しかし結果は大成功だった。秀哉・雁金局が世紀の大乱戦となり、新聞発行部数が一挙に三倍になり、一流誌の仲間入りができたからである。<sup>4)</sup>

あとから振り返ってみれば、棋正社の反乱はコップの中の嵐に過ぎず、団体争碁などと騒いでみても実力差は明白で、棋正社に勝ち目があろうはずはなかった。だがそこに新聞としての商機を見出し、立派な商品に仕立て上げた正力の手腕は驚嘆に値する。中山『昭和囲碁風雲録』からさらに引いてみよう。

正力社長はついに院社対抗戦を造ることに成功した。ひとたび成功したら、これを商品として最高に仕立てようとし、事実、最高級品として売り出したのは流石に商売人であった。

氏はまず新聞紙面を用いて、秀哉・雁金の遺恨試合、大正の大争碁なるゆえんを大々的にあおって宣伝これつとめた。そして、各地に大碁盤を据えて、一手一手の進行を速報させた。この大碁盤速報は、七十余年後の今ならごく普通のことだが、大正の昔にこれを思いつき、実行した正力松太郎は、怖るべき活眼を具えていたと言うしかない。これがある故に、読売はよく絶好のチャンスをつかまえて、三流紙を脱却しえたのである。

さらに、観戦記がまた素晴らしかった。難解ながら名文家の初代覆面子、井上宅治を配し、毎朝、郵便ポストを開ける囲碁ファンは待ち遠しかったという。覆面子の観戦記以外にも、河東碧梧桐、村松梢風、三上於菟吉、菊池寛、児玉花外、笹川臨風、寺尾幸夫、豊島与志雄らの文士を配し、臨時の観戦記を書かせている。<sup>5)</sup>

この時読売新聞は、棋正社が日本棋院へ他流試合を申し込む公開状を掲載（1926年8月23日）したのを皮切りに、棋正社側からは雁金七段、小野田六段、高部六段らの談話をのせたり、日本棋院側からは本因坊秀哉のほか渡邊鐵藏理事、林幾太郎専務理事、高橋錬逸幹事などとのインタビューを連日にわたって記事にし、読者の関心を惹こうと躍起になっている。果ては当時立憲政友会代議士の鳩山一郎の「回避は卑屈だ 双手を挙げて試合に応ぜよ」なる談話からはじめて数名の代議士や貴族院議員、法学博士などの意見を掲載し、徐々に外堀を埋めていく。名人秀哉が打つと言い、一般の大衆も対局を望むとあれば、最終的に大倉副総裁も首を縦に振らざるを得なかったであろう。ひと月後の9月19日には「棋道興隆のため喜ばしい対局」という大倉喜七郎の談話が載り、9月27日から日本棋院対棋正社敗退戦の第一局、本因坊秀哉対雁金準一七段戦がとり行われる次第となった。

この読売が仕組んだ「一大決戦」は結局6日にわたって打ち継がれ10月18日にとうとう雁金七段の力が尽きた。その間、朝刊に連載される囲碁欄（計22回）の観戦記は河東碧梧桐以下、そうそうたる文人が交替で（時には二者が並立しながら）担当している。最後はさすがに駒が尽きたのか——勝敗が決した後、大物ライターに依頼するのは気が引けたのか——「斯界の権威」である某氏が講評するという形で覆面子<sup>6)</sup>が「名人碁の是非」を連載している。棋譜の連載と観戦記をまとめると以下ようになる。

- 9月28日 第1譜 河東碧梧桐「大正争棋観戦記（一）」
- 29日 第2譜 同上（二）
- 30日 第3譜 同上（三）
- 10月1日 第4譜 同上（四）、村松梢風「名人上手 烏鷺争覇戦記（一）」
- 2日 第5譜 同上（五）、同上（二）
- 3日 第6譜 同上（六）、三上於菟吉「仰星雜観（上）大正争棋を観る」
- 4日 第7譜 同上（七）、同上（下）
- 5日 第8譜 同上（八）、菊池寛「大正棋戦一瞥記」
- 8日 第9譜 児玉花外「棋上の風雲（上）」
- 9日 第10譜 同上（下）
- 10日 第11譜 笹川臨風「縦横開闔録（上）」
- 11日 第12譜 同上（下）
- 12日 第13譜 寺尾幸夫「一子下される迄（上）」
- 13日 第13譜\* 同上（下）

- 14日 第14譜 けふ、愈よ決勝戦\*観戦記ではなく無署名の記事
- 15日 第15譜 医師の勧告により本因坊対局を延期\*同上
- 16日 第16譜 十八日の決勝戦\*同上
- 19日 第17譜 雁金七段時間切れで投げて本因坊勝\*同上
- 20日 第18譜 隠れたる斯界の権威が両棋伯の対局講評\*同上
- 21日 第19譜 覆面子「名人碁の是非（一）」
- 22日 第20譜 （覆面子病気のため休載）
- 23日 第21譜 覆面子「名人碁の是非（二）」
- 24日 第22譜（完） 同上（三）<sup>7)</sup>

日本の新聞でこれほど大きく囲碁を取り上げたことはない。そこには正力社長の意向が色濃く反映していると見ていいだろう。碁・将棋部門は社長直属として正力の指揮下にあった。

その後も院社対抗戦は続いたが、日本棋院の若手精鋭を前にして棋正社の旗色は悪い。中盤戦で木谷四段が八人抜きを達成するに至って趨勢ははっきりした。しかし、これでは読者の興味が持続しない。話題作りのために読売新聞は、肺結核を患って神戸に雌伏していた野沢竹朝五段に応援を依頼した。野沢竹朝（1881～1931）は本因坊秀栄門下。明治末期には「常勝將軍」の異名を取ったが、後に本因坊秀哉の碁評を批判して破門されている。院社対抗戦当時は病氣療養のため13年にもわたるブランクを強いられていた。野沢は棋正社七段として対抗戦の後半に出場し、4勝3敗の成績を残した。最終的に院社対抗戦は日本棋院側の26勝14敗2ジゴで終了したが、野沢竹朝七段は余勢を駆って1927年3月からは日本棋院の鈴木為次郎七段と十番碁を戦うことになった。主催はもちろん読売新聞である。この十番碁は1930年2月の第九局まで打ち継がれ、始めのうちこそ両者互角に渡り合ったが、次第に野沢の病状が悪化して、後半は鈴木に押し切られた。第九局を持碁で打ち終えてから一年を経ずして、野沢は鬼籍に入っている。

## 呉清源の来日

呉清源は1914年5月19日、中国福建省福州市の生まれ。本名は呉泉という。瀬越憲作七段に才能を見いだされて1928年来日、瀬越門下に入る。本因坊秀哉名人等との試験碁の結果、翌29年、日本棋院の飛び付き三段を許された。以来、めきめきと頭角を現し、1933年には木谷実五段とともに囲碁戦法の革新となる「新布石法」を発表した。そんな中、トーナメントによる日本囲碁選手権手合が1933年に読売新聞主催で行われ、

優勝した呉清源が本因坊秀哉名人と記念対局で対決することとなって話題を呼ぶ。はたして呉清源は、秀哉名人との記念対局でもこの新布石を用い、名人に対して失礼千万との批判を浴びながら、大いに注目を集めた。

こののち、1938年に本因坊秀哉名人が木谷実七段と有名な引退碁<sup>8)</sup>を打って碁界を退くと、毎日新聞社が本因坊名跡を買い取り、「本因坊名跡争奪全日本選手権手合」を創設した。全日本的な組織としての日本棋院の創設（1924年）と世襲制の名人を廃止して選手権制の本因坊戦を開始したこと（1938年）は、日本における碁界の近代化を語る上で二大ターニング・ポイントといってよいだろう。そして呉清源の棋士としての歩みは日本碁界近代化の歩みと軌を一にしている。欠くべからざる推進力だったとも言える。呉清源のもっとも重要な功績の一つは17年間に及ぶ「打込み十番碁」(1939～56年)の完全なる勝利（いずれの相手も打込む<sup>9)</sup>）であるが、そのいずれもが読売新聞の主催で行われている。それだけ呉清源は読売新聞にとっての大看板だった。

### 呉清源と読売

読売新聞囲碁欄の特徴は、読売新聞自体の紙面づくりの特徴をそのまま体現したかのようで、「イベント企画」の一語に集約できるだろう。この間の事情を佐野真一は次のように分析している。

正力はすでに、大正十五年の囲碁欄や、名人木村義雄と全八段総当たり戦を載せた昭和二年の将棋欄で大ヒットをとばしていたが、夕刊発刊後の昭和八年、今度は、天才の名をほしいままにしていた中国生まれの呉清源と本因坊の対局という囲碁ファン垂涎のプランを企画した。正力は勝負予想を懸賞でつのり、読者人気をあおるだけあおった。

（中略）

本因坊と呉清源の対局が行なわれた昭和八年、読売の部数は五十万部に迫る勢いを見せていた。イベント企画は、今や正力読売のドル箱だった。

イベントをぶちあげればまず読者が興味を持つ。つづいてこれに協賛するスポンサーの広告も集まる。当たるイベントさえ企画できれば、新規読者の獲得で販売収入をあげられ、新規広告主の出稿で広告収入もあげることができる。さらには興行自体の収入を見込むことができる。正力が水雷作戦と名づけたこの紙面づくりは、大衆社会におけるメディアというものを最大限活用した、いわば一石三鳥の戦略だった。<sup>10)</sup>

「大正十五年の囲碁欄」とは前述した院社対抗戦を指す。新聞とはそもそもニュースを



取材して記事にするものだろうが、正力社長の辣腕はニュースそのものを企画してしまうところにある。社長就任直後の国技館納涼博覧会に始まって、最たるものは読売ジャイアンツであろう。院社対抗戦もまさにそのようなものだったし、大勢が決したのち、野沢竹朝を起用したのもその延長にある。朝日の大手合、毎日の本因坊戦に対抗する「イベント企画」として読売新聞が目をつけたのが呉清源だった。名人として君臨する本因坊秀哉に挑戦する棋士を選ぶために日本選手権を読売が企画し、その戦いを勝ち抜いたのがほかでもない、当時中国から彗星のごとく現れて注目を集めていた呉清源である。もちろん他の棋士が勝ち上がる可能性は十分あったが、「イベント性」という点で、呉清源の右に出るものはいない。呉清源が選手権の決勝に勝った時の正力社長の喜びようは尋常でなかったようである。その後、読売と呉清源との間で独占契約が交わされ、蜜月時代が始まる。そして打込み十番碁は「イベント企画」として出色の出来だった。

#### 日本囲碁選手権と記念対局

1932年10月、読売新聞は二万号記念事業の一環として、日本囲碁選手権ならびにその勝者と本因坊秀哉名人との記念対局を企画した。出場棋士は16名。ほぼ一年をかけてトーナメントを戦い、選手権者を決定する。翌年の8月、トーナメントを勝ち抜いたのは読売の思惑通り、呉清源であった。決勝で敗れた橋本に向かって正力は「良く負けてくれました」と礼を言ったといわれるが、敗者の心情をおもんばかる以前に本音が思わずこぼれ出たと見るべきだろうか。名人の相手が呉清源であればこそ、イベント性が最高潮に達することを正力は見抜いていた。

そもそも二十一世本因坊秀哉は世襲制による最後の名人である。名人たるもの、おいそれと負けるわけにはいかない。負けないうえにどうするか。そもそも勝負碁を打たないというのが最良の策である。江戸期以来、歴代名人はいずれも名人に就任してからは極端に対局数が少なくなるのは、こうした理由からだ。秀哉名人も1926年の院社対抗戦の緒戦で雁金八段と対戦して以来7年間、勝負碁から遠ざかっている。今回の呉清源との対局にしたところで、初めは自身の還暦を記念した指導碁程度の認識だったようだが、読売の方はそれではイベントとしてのインパクトに欠ける。なにしろ謳い文句は「不敗の名人対鬼才呉清源の対決」である。「囲碁界空前の大手合わせ」「名人最後の勝負碁」（9月12日朝刊）とさかんに煽り立てる。さらに一か月にわたって金時計を懸賞にした読者予想を募り（9月18日夕刊から）、読者の興味を惹こうと努める。

「昭和を飾る大棋戦」（10月16日朝刊）は10月16日に火蓋を切った。翌17日から三日連続で直木三十五の「昭和の大棋戦観戦記」と題したコラムが連載される。読売

にとってうれしい誤算だったのは、この年が奇しくも新布石が開発された年に重なっていたということだろう。囲碁の戦略にも「近代化」なるものがあるとすれば、新布石戦法はまさしくこの近代化に当てはまり、以降、碁の考え方に大きな変革がもたらされた。その新布石を編み出したのが、誰であろう木谷実と呉清源であった。しかも、旧来の戦法の大御所たる秀哉名人との大勝負にあたって、呉清源が臆することなく新布石を用いてわたり合ったものだから、これ以上にセンセーショナルなことはない。呉清源第一手の三々は本因坊家にとっての禁じ手であるが、それを敢えて本因坊秀哉にぶつけたのみならず、三手目が星、五手目が天元と、奇想天外な構図で名人に挑んでいく。読者の評価も若武者の意気をよしとするものから、名人に対して失礼だと憤慨するものまで、賛否両論、大いに沸いた。

結局、この対局は1934年2月5日の終局（白番秀哉名人の2目勝ち）に至るまで14回にわたって打ち継がれ、同時並行した新聞の棋譜連載も119回という、これまでにないロングランとなった。

### 打込み十番碁

本因坊秀哉が木谷七段と有名な引退碁（1938年）を打って棋界を退いたのち、誰が日本の第一人者かという興味関心がわいてくるのは自然な成り行きだろう。呉清源か木谷実のいずれかに違いないという見立てで世間は一致していた。そこに目を付けたのがまたもや読売新聞である。<sup>11)</sup>

両者はすでに1933年3月から時事新報社の企画で十番碁を争っている。ただし、これは打ち込み制ではないので、対局者にとってはよほど気楽であろう。当時木谷五段は24歳、呉清源五段は19歳で、人気・実力ともに若手の中では抜きん出たスター棋士の対決だった。

この十番碁を争っている最中の夏、二人は一週間ほど信州の地獄谷温泉にこもって例の「新布石」を編み出した。この研究成果の表れが、十番碁の第五局、呉清源の黒31となって結実している。

結局、時事新報の十番碁は、第六局まで打たれたところで木谷が六段に昇段したため、三勝三敗で中止となる。その後、前述した本因坊秀哉との名人勝負碁を経て、1939年9月から、いよいよ木谷・呉の打ち込み十番碁が始まる。今度は七段同士である。

当時、囲碁棋士が最も精力を傾けて臨んだ対局は日本棋院で行われる大手合（朝日新聞が掲載）で、昇段はひとえにこの大手合いの成績いかんによる。相撲でいえば「本場所」に相当するのが大手合いで、新聞碁は番付に影響しない「花相撲」といった位置づけであっ



た。しかし、何といっても打ち込み制は棋士の名誉がかかった真剣勝負である。あくまで対局者二人に限定された格付けとはいえ、打ち込まれば「格下」のレッテルを張られることになる。たとえ日本棋院の公式の段位に影響しなくても、不名誉であることには変わらない。後の藤沢庫之助九段は、呉清源に二段差まで打込まれて日本棋院を脱退している。打ち込み制はいわば棋士人生を賭けた戦いなのである。読売新聞曰く、

今回の十番碁は両七段<sup>12)</sup>が対等の手割をもって開戦し、しかも本社独占の打ち込み制によって四番勝ち越せば一段差と同様に先相先の手直りとなるのでありますから、その対局の壮烈さは言語に絶するものがあるであります。段位を超越し双方の勝負によって手割を決定する打ち込み碁にこそ個人競技たる囲碁の本領があり、伝統千年に及ぶ囲碁の真髄はここにあったのであります。従って打込み十番碁こそは最も棋理にかなった争覇の方式であり、古来碁所<sup>13)</sup>争い、名人争いがいずれもかかる方式によって行われたのは当然のことであります。<sup>14)</sup>

読売新聞は、「打込制手合」の独占契約を日本棋院と結んでいた。当時人気の大手合といえども打込み制の真剣一騎打ちに比べれば物の数ではないといわんばかりの読売の気概が読み取れる。さらにはこの一見大時代でセンセーショナルな趣向が、同時並行で進行している毎日新聞の近代化された「第1期本因坊戦」に対抗せんがためのものであることは、一目瞭然である。

#### ① 鎌倉十番碁

そして最初に実現したのが、木谷対呉のいわゆる「鎌倉十番碁」である。条件は四番手直りの打込み制、持ち時間13時間、三日打ち切り、封じ手の採用、手合中は泊まり込みとするなど、多くの新機軸がもたらされた。それまで、重要な対局ほど持ち時間はあつてないようなものだった。呉对本因坊秀哉の「名人勝負碁」では四ヶ月近くかけて打ち継ぎ、対局時間は合計で44時間23分を記録している。これを現代風にスピードアップし、体力への負担を軽減しようというのが新ルールの趣旨であろう。封じ手は「名人勝負碁」の際にはまだ採用されておらず、打ち掛けはつねに名人の手番で行われた。これなら次の打ち継ぎまでにいくらでも考えられる。しかも居場所を拘束されるわけでもないから、弟子や仲間と検討することすら不可能ではない。打ち込み十番碁ではこのような不公平さも解消された。対局場としておもに鎌倉の神社仏閣（建長寺西来院、円覚寺帰源院、鶴岡八幡宮）が選ばれたために、「鎌倉十番碁」の名で呼ばれる。

第1局の開始は1939年9月28日。読売新聞囲碁欄の観戦記を書いたのは第五局目までは四代目覆面子の三堀将、第六局目からは五代目覆面子の多賀谷信乃であった。番碁の方は二、三か月に一局のペースで進行していくのに対して、観戦記は一局を二十数回に分けて連載されている。勝負の方は第6局までで呉清源が5勝1敗となり、木谷実を先相先に打ち込むことに成功する。最終的には呉七段の6勝4敗で打ち終えた（1941年6月6日）。

## ② 対雁金準一八段打ち込み十番碁

正力社長が次に目を付けたのが雁金八段である。八段と七段では格が違うが、当の雁金は、木谷七段を打ち込んだ呉清源を、実力八段と認めていた。とはいえ、雁金は日本棋院と敵対する棋正社の総帥であり、日本棋院が難色を示す。ここで剛腕を振るったのが、ほかならぬ正力社長だった。雁金を棋正社から脱退させ、新たに瓊韻社という囲碁結社を作ってそのトップに据える。こうして読売は、1941年8月からの呉対雁金打ち込み十番碁にこぎつけることに成功した。持ち時間は14時間、三日制の対局条件である。

時に雁金62歳、呉27歳。戦時中のことで、朝刊紙面は一枚の表裏2面のみ。十番碁も小さな扱いながらろうじて掲載は続いた。翌1942年の5月4日、第5局目が終了した時点で呉清源の4勝1敗となり、十番碁は無期延期となった。「正力社長が雁金の名誉および体調を考慮して、第六局以降を中止とした」<sup>15)</sup>とされる。

## ③ 対藤沢庫之助六段打ち込み十番碁（第一次）

1942年、呉清源は八段に昇段する。こうなると、十番碁を争うにふさわしい高段者が見当たらない。そこで若手のホープとして期待を集めていた藤沢庫之助六段に目がとまった。二段差なので藤沢定先の手合だ。持ち時間は各10時間、二日打ち切り制での打ち込み十番碁である。12月27日に第1局が開始。第5局が打たれる前に藤沢は日本棋院の七段に昇段したが、十番碁での手合は定先のままで行われた。第7局終了時点（1944年2月）で呉の4勝3敗だったが、ここで呉に召集令状が来る<sup>16)</sup>。ただし、健康上の理由（呉は結核病みであった）で徴用は免除された。相次いで藤沢も召集されたが即日帰宅となる。勝負は残り3局を連勝した藤沢が6勝4敗で勝ち越した（1944年8月終了）。定先というハンディ付の手合とはいえ、打ち込み十番碁で呉清源が負け越したのは唯一この対藤沢第一次打ち込み十番碁のみである。

④ 対橋本宇太郎八段打込み十番碁（第一次）

第二次大戦敗戦後の混乱が残る1946年7月、読売新聞は対橋本宇太郎八段との打ち込み十番碁を企画する。両者早打ちのため1日打ち切り、持ち時間は各7時間で行われることになった。呉清源はこの間2年ほど新興宗教の璽字教に専心し（入信は1944年）、囲碁からは遠ざかっていた。教祖璽光尊の許しを得て、呉は碁界に復帰する。8月に行われた第1局では精彩を欠き、ブランクの影響が危ぶまれたが、2局目から4連勝。1947年11月2日の第8局で兄弟子の橋本を先相先に打ち込んだ。十番碁は通算6勝3敗1ジゴで1948年1月28日に終了している。

⑤ 対岩本薫八段（本因坊薫和）打込み十番碁

次の相手は本因坊位を連覇して八段になったばかりの岩本薫である。こちらは長考派のため、3日打ち切り、持ち時間各13時間という条件で対局が行なわれた。1948年7月7日に勝負が開始され、11月18日の第6局終了時点で呉清源の5勝1敗。向先相先に打ち込むことに成功した。最終的には7勝2敗1ジゴで打ち終えている（1949年2月24日）。読売新聞の観戦記は五代目多賀谷覆面子から六代目覆面子山田虎吉が担当することになった。

⑥ 対橋本宇太郎八段打込み十番碁（第二次）

1949年6月8日、藤沢庫之助八段が九段に昇段する。大手合制度が始まって以来、初の九段が誕生した。当時九段といえば名人にも等しく、時の第一人者のみが背負える肩書であるはずだが、一方で、打ち込み十番碁において錚々たる棋士を打ち込んでいる呉清源が八段では、せっかくの九段の名が泣いてしまう。

ところで、呉清源は1947年8月に、日本棋院を離脱したことであった。が、本人はこのことをまったく知らない。事実上、読売新聞専属のようなかたちで十番碁を打ち続けていた。

そこで、呉清源を九段に昇段させ、打ち込み十番碁によって事実上の名人を決めるべしという機運が高まった。九段昇段のための試金石として、日本棋院高段者総当たり打ち込み十番碁がおこなわれ、呉清源が8勝1敗1ジゴと圧倒する。この結果、1950年2月15日、日本棋院の名誉客員棋士として呉清源に九段位が贈られた。

いざ待望の頂上決戦かと思いきや、対局条件その他で折り合いが付かず、両者の十番碁はなかなか実現しない。そこで岩本薫和を破って本因坊に返り咲いた橋本宇太郎（本因坊昭宇）八段との第二次打ち込み十番碁で間をつなぐこととなった。その際、読売が掲載し

た社告が、藤沢九段の感情に火をつけることになる。

呉氏と藤沢庫之助九段との顔合せは呉氏がいつでも受けて立つ気構えでいるにもかかわらず、なぜか藤沢九段は打とうとしないために実現せず、しかも昇段後の藤沢九段はスランプ気味で、(中略)橋本本因坊が本因坊戦に優勝するに及んで碁界の関心は「呉・藤沢」の顔合せからいまや完全に「呉・橋本」に移った感があり、本社は藤沢九段の立ち直る日を期待しつつこの「呉・橋本」十番碁を行うことになった。<sup>17)</sup>

藤沢九段は即座に『棋道』誌8月号に反論を掲載し、盤外戦が火花を散らす。この藤沢対読売の確執が長々とこじれる間に、対橋本(第二次)打込み十番碁が先行することになった。

手合割は第一次の結果を引き継いで橋本の先相先。二日間打ち切りで、持ち時間は各10時間という条件である。1950年7月25日にスタートした呉・橋本第二次打ち込み十番碁は、1951年8月9日に第10局を打ち終え、結果は呉清源の5勝3敗2ジゴに終わった。第9局と第10局の間に丸々4か月のブランクがあるが、その間橋本は一期一年に改められた第6期の本因坊戦七番勝負(4月14日～6月28日)を戦い、坂田七段を退けて防衛に成功している。独立間もない関西棋院(1950年～)の総帥として命運を賭けた戦いだった。

#### ⑦ 対藤沢庫之助九段打込み十番碁(第二次)

事実上の名人決定戦たる呉・藤沢両九段の打込み十番碁は、二年越しのごたごたによりやく収まりがつき、1951年10月20日に晴れて第1局が行なわれる運びとなる。持ち時間は長考派の藤沢に呉が譲歩して、三日間打ち切り、持ち時間各13時間という条件で落ち着いた。打ち初め当日の読売新聞朝刊には「素人五段」鳩山一郎の談話が載り、翌日の経過速報に合わせて梅崎春夫の観戦記も掲載された。梅崎春夫の観戦記は第1局の決着が付いた10月23日の翌日の朝刊にも続編が掲載されるという念の入れようだ。「昭和最大の争碁」と大見出しで謳いあげられたこの「世紀の打込み十番碁」は、前半戦において藤沢が2勝1敗1ジゴとリードしていたが、天王山の第5局を制した後は、呉が一気呵成に寄り切った。結果は第9局で呉が藤沢を先相先に打ち込むことに成功する。そのまま第10局も勝って7勝2敗1ジゴで打ち終えた(1952年7月4日)。

⑧ 対藤沢庫之助九段打込み十番碁（第三次）

はたせるかな、三ヶ月後に早々と藤沢九段がリターンマッチを挑んできた。第1局は1952年10月10日に開幕。覆面子の観戦記に曰く、「藤沢九段には相当休養の期間を与えるべきだとの論もあった」(10月12日朝刊)という。結果的に見れば頭に血が上った藤沢を冷静な呉がうまくいなした格好となり、第6局目で呉清源の5勝1敗と、藤沢九段を定先に打ち込んだ(1953年3月4日)。規定によりこの十番碁はここで打切りとなるが、3月16日の読売新聞には川端康成が「日に新たなる者 呉清源の印象」と題された長文の論評を寄せている。「初めの十番碁で打ちこまれた藤沢九段が、時をおかないで再び十番碁を挑んだのは、結果論からばかりではなく、どうかと思われる」と、川端は藤沢に対して手厳しい。

前述のごとく、打込み制は棋士生命をかけた戦いでもある。通常のタイトル・マッチなら負けても次があるが、打込み制だとそうもいかない。二回連続して打込まれた藤沢は結局日本棋院を脱退し(1959年復帰)、名を庫之助から朋斎と改める仕儀となった。

⑨ 対坂田栄男八段打込み十番碁

次なる相手として白羽の矢が立ったのは新進気鋭の坂田栄男八段だったが、段差からすると先相先の手合となる。打ち込み十番碁の相手としてふさわしいかどうか見極めるための前哨戦として、まず1953年5月から始まる六番碁が企画された。この六番碁で4勝1敗1ジゴと坂田が勝ち越したために、いよいよ御膳立てが整い、1953年11月4日から、呉・坂田打ち込み十番碁が始まった。当日の朝刊には川端康成と岸信介が、それぞれ呉と坂田を応援する立場からコメントを寄せている。

勝負は1勝1敗で迎えた第3局が天王山だったようで、中盤まで優勢だった黒番の坂田が時間に追われて決めそこね、勝ち切るチャンスを逃してしまう。2勝2敗で迎えた第5局を落として以降呉清源の壁はいよいよ厚く、第8局終了時点(1954年6月25日)で6勝2敗と、さしもの坂田も定先に打ち込まれ、2局を残したまま十番碁も打ち切られた。

⑩ 対高川格八段打込み十番碁

ここまでくるとさすがに相手を探すのが一苦労だ。本因坊位を4連覇し八段にも昇段した高川格が呉清源に立ち向かうこととなった。しかも、本因坊4連覇の実績にかんがみて、八段ながら互先の手合である。持ち時間は10時間だ。1955年7月19日を皮切りにした打ち込み十番碁の結果は、第8局の時点で6勝2敗となり、またもや呉の前に先相先へ打込まれてしまう。最終的には6勝4敗で決着した(1956年11月27日)。

そして、呉清源の打込み十番碁も、これ以降企画させることはなくなった。読売新聞は専売特許の打込み十番碁に見切りをつけ、名人戦を次なる大看板として掲げようと模索を始める。

## おわりに

このように、呉清源は同時代の有力棋士をことごとく先相先かもしくは定先に打ち込んだ。もはや並び立つものなしといった観を呈し、読売新聞は打込み十番碁の企画そのものを取りやめてしまう。日本の囲碁界が世襲の家元制度から脱皮して、日本棋院を中心に近代化していく中、打込み十番碁という懐古趣味的な企画は、当初かえって斬新にも感じられたかもしれないが、呉清源があまりにも強すぎたために、「イベント企画」としての新味を失い、やがて読者の興味を惹き続けることができなくなったのだろう。呉清源の黄金時代を飾ると同時に、日本近代囲碁界の中軸を形成した打込み十番碁は、こうして幕を閉じる。

読売新聞の側から見れば、正力松太郎社長就任以来の読売快進撃の推進力の一つとして呉清源の存在は無視できないだろう。当時囲碁・将棋欄は新聞の売り上げを伸ばすために各社がしのぎを削る「戦場」だった。朝日には「大手合」というドル箱があり、毎日とは本因坊戦で対抗をはかる。そこへ読売は呉清源をプロデュースしつつ割って入った。三つ巴戦の結果は読売に軍配が上がったと見ていいだろう。坂口安吾曰く、「読売新聞は碁の方は呉清源を一手に握っているから、朝日の棋院大手合、毎日の本因坊戦に比べて、まさるとも見劣りのない囲碁欄である。」<sup>18)</sup>

## 参考文献

- 安藤如意・渡辺英夫『坐隠談叢』（新編増補，渡辺英夫改補版）新樹社 1973年  
上之郷利昭『読売王国』講談社 1984年  
桐山桂一『呉清源とその兄弟』岩波現代文庫 2009年  
呉清源『以文会友』（新装版）白水社 1997年  
『呉清源棋話』三一書房 1993年  
『呉清源の生涯一局』誠文堂新光社 2014年  
『碁は調和である』講談社 2000年  
佐野真一『巨怪伝』文藝春秋 1994年  
中山典之『昭和囲碁風雲録（上・下）』岩波書店 2003年  
水口藤雄『真髓は調和にあり』農文協 2003年  
三堀将・山田虎吉編『呉清源打込十番碁全集』（全五巻）講談社 1979年  
安永一『囲碁百年』（補訂新版）時事通信社 1989年  
山田覆面子『天才棋士の記録』誠文堂新光社 1978年



## 注

- 1) ここまでの記述は「囲碁の歴史・出来事」(<http://www.igodb.jp/cgi-bin/whatday/history.cgi>) ならびに「囲碁史年表」([http://mignon.ddo.jp/assembly/mignon/go\\_history/go\\_history.html](http://mignon.ddo.jp/assembly/mignon/go_history/go_history.html)) を参考にした。
- 2) 『読売王国』 p.86
- 3) 鈴木、加藤が相前後して日本棋院に復帰したため、この時点で棋正社所属の棋士は雁金、高部、小野田の三名に減っている。
- 4) 『昭和囲碁風雲録 (上)』 p.34
- 5) 同上 p.38
- 6) 覆面子は読売新聞囲碁観戦記者のペンネームで、この秀哉・雁金局から採用された。初代井上宅治以下、二代西川勉、三代井上宅治(再任)、四代三堀将(1938~40)、五代多賀谷信乃、六代山田虎吉(1947~75)と続く。
- 7) 10月31日(八)まで「名人碁の是非」の連載は続く。
- 8) 川端康成『名人』に描かれた対局である。
- 9) 江戸時代より、日本囲碁界では段差が大いに重要視された。囲碁は先手番が有利なゲームであるため、同段同士での対戦ではお互いに先手番・後手番を入れ替えて対局する。(これを互先という。)1段差の者同士の対局では、下手から見て「先手・後手・先手」という3局1セットで、対戦する。(これを先相先という。)例えば、最初互先でスタートした番碁の勝敗差が4(例えば5勝1敗)になったところで、手直りとなる。これを「先相先に打込む」という。打込み十番碁で打込まれるということは、打込んだ相手よりも一段格が低いという烙印を押されることであり、再度打込み返さない限り、互角の勝負をしてもらえないということを意味する。棋士の名誉がかかった真剣勝負なのだ。
- 10) 『巨怪伝』 p.143
- 11) この間、一方で本因坊の名跡を受け継いだ毎日新聞社主催の「本因坊戦」が1939年から始まっている。やはり「当代の実力一位を決定する」という主旨は似かよっているが、こちらの棋戦は低段者の予選トーナメントから始まり、4次にわたる最終トーナメントによって二名の勝ち抜き者を選び出し、六番勝負で勝者を決めるというもので、「近代的」な仕組みに依っている。1941年になってようやく決着し、関山利一が第1期の本因坊位に就いた。
- 12) 呉・木谷のこと。
- 13) 「ゴドコロ」と読む。江戸幕府に置かれていた機関で、時の第一人者がこの任につき、将軍の相手をしたりする。1677年に創設され、初代は本因坊道策。囲碁界の政治上の最高位。一方、名人は技量上の最高位を指すが、名人が必ずしも碁所になれるとは限らない。
- 14) 『読売新聞』1939年9月20日「龍虎相打つ空前の大棋戦」
- 15) 『真髓は調和にあり』 p.92
- 16) 呉は1936年に日本に帰化している。
- 17) 『読売新聞』1950年7月7日
- 18) 坂口安吾「九段」(『坂口安吾全集(第11巻)』(筑摩書房1998年)所収, p.342)